

くらがね通信

No.58 (秋号)

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

2014 年 10 月 28 日発行

「生物多様性ひだたかやま戦略実施行動計画」 に対する具体的提言を、市長に提出

10 月 21 日（火）高山市長に対し、小野木副会長以下 7 名の会員が参加し以下のような提言書を提出してきました。これは、一昨年一般市民の方々も参加して 5 回にわたり、「実施行動計画」に関する学習会を行った内容を取りまとめ、提言として練り上げたものです。以下全文を掲載します。

（新聞報道の切り抜きも掲載）

高山市長 國島 芳明 殿

「生物多様性ひだたかやま戦略実施行動計画」に対する具体的提言

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会
会 長 飯田 洋

1 環境省、林野庁に関わる諸保護制度実状の再検討、見直しを行い、国・県への提言を行う市民参加型の委員会の設置を望むものである。（例えば、御嶽山の国立公園への昇格、緑の回廊・各種保護林の拡大、自然公園の地種区分の見直し等）

2 2013 年に高山で行われた「第 13 回ライチョウ会議岐阜大会」において、ライチョウの実態把握の調査が他県に比べて非常にお寒い実態が明らかになったが、ライチョウが生息する県として恥ずべきことである。飛騨山脈域で、継続的なライチョウ調査の実施をすべきである。

3 城山公園は 1970 年代まで日本一のオシドリ繁殖地であった。1998 年を最後に繁

殖は途絶え、チゴモズ、アカモズ、ヒクイナ等も市内から姿を消した。稀少生物保全のモデル事業として、城山のオシドリの繁殖地の回復を目的に、飛騨地域一帯のオシドリ生息調査を行い、まずは現状把握を行うべきである。

4 生物多様性の危機の大きな原因に里地里山の荒廃があげられる。原山スキー場跡地はユウスゲ、キキヨウ、コオニユリ、オミナエシ、ササユリ等々、古くから里山では当たり前であった希少な植物が残っている。しかし、このまま放置すればいずれ林となり消滅する運命にある。こうした植物を保護するために、草原の一部を定期的に採草することによって希少植物の更新・再生をはかる必要がある。そのためには自然公園法16条の公園管理団体などに採草を行わせるなど、市民と協働の実践行動の実験場とする手法を検討すべきである。また刈取った萱は飛騨の里などで利用する。

その他、傷病鳥獣の保護（野生鳥獣救急活動）、希少動植物の保護増殖などのためにも原山に「生物多様性センター（仮称）」を設置し、活動の拠点とするよう岐阜県に積極的に働きかけるべきである。

5 我々は、原山で哺乳動物、鳥類、植物の定点観測を数年前から継続して行っている。今年も調査を開始している。市民に呼びかけて、市民レベルでの様々な野外調査を行うことを提案する。

◎ オオハンゴウソウの駆除に多額の予算がつぎ込まれているが、実際の効果は目に見えるものではない。実態はオオキンケイギク、セイタカアワダチソウ、ハルザキヤマガラシ、ハルジョオン、フランスギク、ヘラオオバコなどが憂慮すべき状態にある。したがって、まずはこれら外来植物の生育生息実態調査を実施し現状把握をすべきである。そのために、市民を巻き込んだ（コンサルタント任せでない）帰化植物調査団（仮称）を結成し、3～5年計画で市域全体の実情調査を行うべきである。

◎ シカ、イノシシ、サル、カモシカなどの目撃情報による生息分布調査を、体系的に行う。コンサルタントに委託する調査ではなく市民レベルで行うことで、たとえ精度は上がらなくても、市民参加の方法で調査を行うなど、生物多様性に対する意識改革を目差すべきである。

◎ 上記調査を親子で実施すれば、生物多様性の自然環境教育にもつながる。単発的なイベントの「カワゲラウォッチング」より、よほど広範囲に行えるはずである。

6 河川生態系保全の立場から「宮川へのコイの放流」を中止する。そのためには 先ず市内の河川の観察会を行い、川辺を含む河川の自然生態系を市民に学んでもらいつつ、コイの放流中止のコンセンサスを作っていくべきである。なお、河川整備は、生物多様性を最大限保全する工法（多自然型工法）で施工されることを望むものである。

7 各地域の公園の整備では、コスモス・ヒマワリ・サルビア・マリーゴールド等外来園芸種による均一花壇造り（特に道路脇）が目立つ。多様性保全の立場からこれら花壇

造りの見直しを行い、「生物多様性ひだたかやま戦略」の目に見える具体的・象徴的事例として、駅西空間に「飛驒の森」、「野草花壇」の造成を行う。

◎ 温帯を代表するブナ・イヌブナ・ミズナラを主にした落葉広葉樹の幼木を、近隣の山から入手し、飛驒高山を象徴する森造りを行い、街中に多様に富んだ緑の空間を創出する。

◎ ヨーロッパ式園芸花壇造りから脱却し、飛驒に自生種の野生花壇を駅西空間に展開し、「生物多様性を目差す街造り」の目玉事業とする。ニュージーランドではイギリス式庭園による花壇造りを見直し、自生種による緑地造りが盛んに行われている。日本では東京駅近くに1ヶ所実験花壇があるのみである。

上記2点については全国に先駆け飛驒高山こそが取り組むべきである。

生物多様性を考慮した公園整備が行われていない。上で提案した「野草花壇」などのために、生物多様性マニュアルを作って市民に配布していくことも一つの方法として提案したい。

8 城山一帯の過密針葉人工林の間伐

広大な針葉人工林の広葉樹林化を目差し間伐を行い、林床植生の多様化及び落葉広葉樹林の育成を行い、森林生態系の多様性を取り戻すモデル事業として実施するよう提案したい。

9 合併後の市域拡大に伴い、自然環境理解のための基礎データである植生などの調査が必要である。市域内の植生等の文献による調査は済んでいると聞いているが、各文献の調査時期はバラバラで現状・実態との差は大きくなっていると予想される。じっくりと腰を据えての市域全体の群落、群集調査や希少生物の調査を行うべきである。このことによって、地域特性を浮き彫りにした地誌作成をする。市域全体の現状調査を市民の専門的知識を持ったハイアマチュアにも積極的に参加してもらい組織化して行うと良い。

10 生物多様性に関する人材バンクは独自に整備し、広範囲な市域全体への派遣をおこなう。現行の人材バンクは、生涯学習課の出前講座のためのものであり、実態にそぐわない。ジャンル毎に人材をリストアップしてデータベース化すべきである。

また、(財)日本自然保護協会主催の自然観察指導員講習会を定期的に高山市（の各地域）で行い、人材の育成に資するべきである。この講習会には全国各地から講習生が集まり、観光・地域振興にも繋がるものである。

11 生物多様性の副読本が小中学校に配布されているが、どのように活用されているか実態を把握し、併せて配布の効果の検証を行うべきである。

12 各地域の旧町誌・旧村誌の記述が現状にそぐわなくなっている。飛驒後風土記ならぬ、「飛驒今風土記」を作ったらどうか・・・調査手法としてもユニークだと思われる。

希少生物の調査 継続を

自然保護団体 高山市長に提言書



市行動計画の見直し訴え

飛騨地域の自然保護団体「乗鞍岳と飛騨の自然を考える会」(飯田洋会長)が21日、高山市役所を訪れ、國島芳明市長に、同市の「生物多様性ひだたかやま戦略実施行動計画」に対して、希少生物の継続的な調査を求めるなどの提言書を手渡した。

(大賀由貴子)

同計画は2010年、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)開催を受けて同市が策定。「土地本来の生物多様性を保全・再生する」など三つの指針に沿った六つの基本施策を掲げている。期間は本年度までの4年間。

この日は、市環境審議会副会長の小野國島芳明市長に提言書を提出する小野木三郎さん(左)ら「乗鞍岳と飛騨の自然を考える会」の会員＝高山市役所



木三郎さん(75)ら会員7人が訪問。「環境省、林野庁の諸保護制度の実情についての再検討、見直し」「飛騨山脈でのライチョウの継続的な調査の実施」など12項目を盛り込んだ提言書を國島市長に提出した。小野木さんは「(同計画には)具体性がない。飛騨地域一帯での希少生物の生息調査を行うなど、現状把握を淮めてほしい」と、同計画の見直しを訴えた。

10月22日市民時報記事

「原山に生物多様性センターを」自然を考える会が市長に意見書

「乗鞍岳と飛騨の自然を考える会」(飯田洋会長)が二十一日、生物多様性や生態系の保全・再生を訴える意見書を國島市長に提出した(左写真)。

この意見書は、同会が一般も含めて開いた「勉強会」(5回)の意見をまとめたもので「日本一といわれていた城山のオシドリ繁殖地復活に向け、飛騨地域一帯のオシドリ生息調査を行って現状の把握を」「原山に傷病鳥獣の保護や、希少動植物の保護・増殖の拠点となる「生物多様性センター(仮称)」の設置を」など十二項目。

この日は同会副会長の小野木三郎さんら七人が訪れ「多くの市民に生物多様性の重要さを知ってもらえるよう、ぜひ検討していただきたい」と訴えた。

道しるべ地蔵

住 寿美子

旧丹生川村内を歩いていると何体かの「道しるべ地蔵」に出会うことができます。現代の私たちが道路標識で道を知るように、昔の旅人たちは柔和な笑みを浮かべた石仏たちに導かれて、旅を楽しんでいたのでしょう。

丹生川村史「民俗編」の中で出筆者の角竹弘先生は、「寺社の門前や路傍にある道標の多くは道しるべ地蔵である。道標が宗教と結び付くのは、道という言葉が道路の道だけではなく道徳の道とも解せられたからであろう」と書いてみえます。石仏たちに道を説かれながら、丹生川村の散歩を楽しんでみませんか！？



「左 せん光寺道」
「右 きり山 ひらゆミち」

千光寺参詣の「八丁坂」の登り口に立ってみえる地蔵様です。優しい細面のお顔が印象的です。

横からの姿も素敵でしょ！



「左 平湯道」
「右 高山道」

これは明治時代の石仏です。現在は桐山の薬師堂の前に他の石仏たちと一緒に安置されていますが、昔はどこにあったのかは不明です。





「左ハ山道」
「右 千光寺」

国府三川の剣緒神社から小八賀川の右岸を上流へ進むと丹生川村の下保村に至ります。数件ある民家の前を通り、山手の道を行くと出会える道しるべ地蔵です。

かつての千光寺詣りの道を彷彿とさせる場所で優しく微笑んでみえます。



「左 大ぬま村」
「右 をしきち」

かつて大萱村の外れ、大沼村への道と折敷地村への道の分岐点にあった石仏です。新しい道路がつけられた今は現代の「みちしるべ」が旅人を案内してくれます。



♣♣♣ 自然観察会 ♣♣♣

★アサギマダラマーキング会（8月31日）

宝田 明

8月31日のマーキング会で放蝶した個体が、再捕獲（確認）されました（現在のところ一頭のみ）、僕が唯一マークした個体でした（チャオ 8/31 タカラ 01）。

9月20日名古屋市東山植物園で再確認（写真撮影で確認、捕獲してない）され、20日間で南南西へ100 km移動したことになります。

ちなみに、宝田個人としての再捕獲はこれが二頭目で、もう一つは9/14にマークしたものが、京都市で再捕獲（10/4）され、マークして放蝶されています。

参加者：鈴木俊文、小野木三郎、松崎茂、佐藤八重子、松尾幸子、塩谷恵子、門前恵美子
住之義・文乃、高嶋恵子、大坪利幸、湯畑恭子、直井清正・陽子、踏込龍生、山田美穂
川上幸治・美奈子・日菜乃、宝田延彦・由美子



★ドングリ植林地の観察会（10月5日）

松崎まみ



背丈より高いウダイカンバ

朝からしとしとと雨の音。誰も来ないかもしれないと思いながら朝日の道の駅へ。小雨決行と案内してあったので、こんな天気にもめげず10人が集まった。傘をさしながらの協議で、4年後の現地の様子だけでも見てこようと話が決まる。

H22年10月24日に手植えした400株の苗木たちを探す。その当時の地面は石ころばかりでどれだけ掘ってもほとんど土は無し。冬が間近で無事に生き抜いてくれるようにと祈りながら植えたドングリやクリ。

石ころばかりの茶色い地面は4年を経て草が生い茂り一面の緑に。でも、ドングリの幼木はどこに？植えた覚えの無いヤナギやハンノキ、ウダイカンバなどが、私たちの背よりも高く伸びて、その下を探すとやっとミズナラの幼木

が。あちこち歩き回って、生き延びてきた株が少しずつ見えてきた。4年前にお兄ちゃんと一緒に植えにきた虎仁郎君が「あっ、これ僕が植えたドングリだ」とうれしそうな声。背の高い木々の陰になりながらもけなげに根付いていた。

光を一杯浴びているミズナラは結構大きくなっていたが、まだまだこれからというものもある。が、大半は消えてしまっている。土の少ない厳しい環境では、生き延びるのは困難なようだ。

帰り道、道をふさぐ黒く大きな生き物がこちらをじっと見つめている。なんと、山手の牧場から脱走した牛たち3～4頭が道端でゆうゆうと草を食んでいる。のんびりとこちらを眺め、やっとこさ通してくれた。飼い主も知らない牛たちの優雅なひととき。



↑
虎仁郎君の植えたドングリ

参加者：大坪利幸、小原靖子、虎仁郎、小野木三郎、直井清正、佐藤八重子、中島輝雅、塚越奈津子、松崎茂・まみ



殆ど成長していないミズナラ



大きな牛だった

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円
あなたの知人、友人に入会をおすすめください
・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第 58 号 (秋号) 2014 年 10 月 28 日 発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

〒 506-0055 岐阜県高山市上岡本町 4-218-3 飯田 洋

TEL : 0577-32-7206 ・ FAX : 0577-32-7207

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：松崎 茂

E-mail : ponykun0428@hidatakayama.ne.jp TEL : 0577-34-4703

■ 編 集 者：住 寿美子

TEL : 0577-34-7237

表紙写真提供：小池 潜

印刷：アドプリンター